

令和4年度 世界に発信する高校生育成事業 ～宮城県気仙沼高等学校～

研究課題

・英語によるコミュニケーション能力を高めるための効果的なパフォーマンステストの在り方及び評価方法

現状の課題

- ・パフォーマンステストの採点基準の作り方に更なる工夫が必要である。
- ・パフォーマンステストの評価に差が出ないようにする工夫が必要である。

課題に対する具体の取組の内容

・パフォーマンステストを実施する際、評価者によって採点にばらつきがでないように基準をできるだけ細かく決めたり、話すことの初回のパフォーマンステストでは、評価者全員でそれぞれが実際に評価し、差がないように基準をより吟味したことで、どの生徒にも同じ条件で行うことができ、公平性を維持することができた。

・パフォーマンステスト前の授業において、当該学年全生徒に対し、ALTやネイティブの英語話者によるパフォーマンステストに関連した同様の授業を2クラスずつ合同で実施することによって、当該学年全生徒がパフォーマンステストに対して共通の認識を持つようにした。評価者だけではなく、受験者も同じ認識や使用語句や表現を学ぶことによって何を問われるのかを全員が同じ目線でパフォーマンステストを受けることが出来るようにした。

成果①

- ・GTECスコアの変容
 - ①トータルスコア(1年→2年の伸び)
R4年度+78, R3年度+74, R2年度+58
 - ②CEFR A2レベル以上の割合
R4年度85%, R3年度88%, R2年度79%
- ・英語使用における情意部分に関する独自アンケート(年度内比較)
 - ①英語が好き 60.1%(3ポイントUP)
 - ②対話的な活動 34.1%(5ポイントUP)
 - ③発信力の向上 65.0%(2ポイントUP)

成果②

・教員から見た生徒の変容
ベネッセオンライン英会話を通して、自分の考えや意見を英語で伝えることに自信が付き、パフォーマンステストを実施する中でいい影響が見られた。パフォーマンステストの点数は平均として高くなり、生徒の英語力の明らかな向上が見られた。1対1の英会話活動を生徒自身が英語力向上には必要と訴えており、今後できるだけ1対1の英会話を取り入れていきたいと考える。

今後の課題・方向性

- ・取組を通して、パフォーマンステストの内容が時間が経つにつれて、生徒の記憶から薄れてしまい、復習の時間が多く必要になってしまっていることから、既習事項の学習を計画的に授業で行えるようにして、学習内容の定着を図っていきたい。
- ・採点基準の公平性が保たれ、当該学年全生徒の目線合わせができたのは良かったが、場面設定が身近な物ではなかったため、できるだけ身近な話題を取り入れたパフォーマンステストを実施していきたい。

令和4年度 世界に発信する高校生育成事業 ～宮城県気仙沼高等学校～



台湾の北門高級中学とのオンラインによる交流会を課題研究という授業にて行った。基本的には英語で会話をしたが、日本語や中国語を教えあったりもした。互いの地域紹介や学校生活の紹介をした。年3回行った。

始業前の朝30分間にアメリカの大学生とオンラインにて英語でのフリートークをした。6ヶ月週1回行った。日本語を教えたり、英語を教わったりした。